

開発援助と人類学

「人類学的」、その意味するもの

関根久雄

●「人類学的」への期待

近年、開発援助と人類学研究双方の議論において、「開発援助に人類学的知見を取り入れる必要がある」、「人類学者は開発・援助に積極的に関与するべき」など、両者の緊密な関係を築くことの必要性に言及した語りを聞くことがある。そのことは、一九八〇年代後半以降に社会開発や人間開発が開発援助の主流になった一般状況と無縁ではない。第二次世界大戦後の途上国開発は基本的には経済学を中心とする「経済開発」の文脈において議論されてきたが、それだけでは人びとの暮らしや生活レベルの現実に十分に対応できるわけではないという認識が、その状況を後押ししている。それでは、社会開発や人間開発などの文脈に人類学や人類学者が「関わる」（「介入する」とは「人類学的」ふるまいとは）どのような行為を意味するのだろうか。人類学者が「人類学者として」開発援助の案件やそのプロセスに応用的に関わることの「要件」があるとすれば、それはどのようなものなのだろうか。人類学者はこれまで

自らの学問分野を実社会に応用させる経験の蓄積が乏しいだけに、その言葉の指し示す内容は極めて曖昧である。ここでは、「人類学的」という言葉やそれと同義の表現が担う意味について、一人人類学研究者の視点から述べることにする。

●「人類学的」であることの要件

一九八〇年代以降の人類学は、学問分野としてのあり方において、それ以前のものとは少々性格を異にする。近代人類学は、一九二〇年代のマリノフスキーによる研究スタイルをひとつのモデルとして成立した。マリノフスキーは、人類学者自身が現地に赴いて現地の人びとと可能な限り接触し、現地の人びとの生活の中に身をおくことを重要視する。彼は、現地社会に身を投じつつ当該社会を観察する方法を「参与観察」とよぶ。その際、調査者（人類学者）は現地の人びととの間における「信頼関係」を構築することが強く求められる。そして、そのような個人的経験を通してはじめて、現地の人びとの「文化を知る」ことができるといえる。ここでいう「文化を知る」

行為とは、ある社会の人びとによって共有されている慣習、言語、社会組織、親族組織、政治、経済、規範などからなる生活様式の「全体」をフィールドワーク（現地調査）を通じて経験的に感得すると共に、文化的現象のもつ意味を、その文化を実践している人びとの行動の動機や価値、意図などと関係づけて解釈することである。実はマリノフスキー以前にも、すでにフィールドワークを伴う研究の萌芽はみられていた。しかしマリノフスキーは、定式化された「科学的手法」としてフィールドワークを広めた点で、彼以前のフィールドワーカーとの違いをみせた。彼の時代以来、人類学はフィールドワークを通じた「経験科学」としてあり、人類学者は「フィールドワーク↓民族誌」という連続した行為を研究上の定式として保持し続け、それを人類学研究の独自性を担保する要素として認識し続けてきた。人類学が経験科学としての性格をもち続ける限り、人類学者が調査地の人びとの日常の中に身をおき（あるいは、近づき）、彼らとの「信頼関係」（ラポール）を構築することは、人類学研究において不可



開発援助と人類学

欠な要素としてある。

しかし、一九八〇年代以降、政治経済学的な意味におけるオリエンタリズム批判の中で、比較的長期のフィールドワークによる一次資料の収集と、それに基づいて当該社会の「文化」を民族誌として記述する方法や記述の行為に対して、人類学者自身からも多くの問題が提起された。それまでの人類学研究では、観察する人類学者は調査対象の人びとから距離をとって「客観的に」現実世界を眺め、人びとの「文化」をモデル化しようとする特権的視座に立つものであった。民族誌において「書かれる」現地の人びとと「書く」人類学者という、権力的かつ固定的、非対称的な関係の図式であった。

この図式を打ち破るために人類学者が考えたことは、フィールドにおける現地の人びとと人類学者との同時間性や人類学者の「主観」の实在を再認識することであった。調査者は、フィールドにおいて必ずしも客観的で特権的であるわけではない。人類学者と現地の人びととの実際のやりとりの中には、日常の何気ない会話や活動だけでなく、特定の状況や個人、団体などに対して、怒りや憎しみ、不満、不快、あるいは好意や賛同、愛情など、必ずしも理性的とはいえない感情に支配されることも、当然ありうる。しかし、それまでの民族誌では、そのような相互的な主観の交錯は排除され、現地の人びとが人類学者とは別の時間の流

れの中にいるかのように「客観的に」表現されてきた。

このような同時間性と相互主観性の強調は、それまでの人類学の基盤を揺るがし、その存立を脅かす程のインパクトをもつていた。だがその議論の多くは、対象となる社会やその人びとに起こる様々な社会文化的事象の動向を全体論的な視点から捉え、文化を「精緻に」書くための技法の話に帰結しがちであった。しかし近年「書く」こと（民族誌）への収斂を人類学研究における「当たり前」のこととするのではなく、現地の人びととの同時間性や相互主観性に立脚して対象となる事象の動向を把握し、その結果として現地の人びとのための「行動」を指向するような人類学あり方も、人類学者の中で受容されつつある（例えば参考文献②、③）。

客観的・超越論的視座から逃れようとする上記の議論を踏まえた上で、「人類学的」であることの究極の要件を考えると、「対象となる社会の人びとの目線に可能な限り寄り添う」（あるいは信頼関係を構築することである。誤解を恐れずに言えば、その意味において人類学研究は、決して価値中立ではない。開発援助の文脈において「人類学的」であることは、「学問」あるいは「学術」という言葉に内在してきた「客観」、権力性や権威を中和し、現地の人びとの視座に「偏る」ことによってはじめて、その扉が開かれるのである。

● 変化する現実を線的に把握する —「人類学的」の特性

人類学は、フィールドワークを通じて対象となる事象の動向を時間的な「線」において把握する。それは様々な時間的「点」における出来事（結果）の連鎖と言え換えることもできる。開発援助プロジェクトの場合、その時間的「点」に現れる「場」は必ずしもプロジェクトの実施地域に限定されるのではなく、場合によっては開発援助機関や受入国の関係機関、NGO、あるいはプロジェクトの進行過程に登場する様々なアクターたちを含む現象全体に及ぶこともありうる。このような「出来事」（結果）に注目する行為は、開発援助の文脈においては、プロジェクト評価と結びつきやすい。プロジェクト評価は、ログフレームと呼ばれるプロジェクトの概要表（成績表）を用いて行われることが多い。これは、活動、指標、投入の内容、外部条件などを「原因と結果」の因果関係の連鎖で整理し、プロジェクトの内容や目標を明示するためのツールである。ログフレームはあくまでも「概要表」（成績表）であるため、情報量において著しく限定的である。そのため、当該プロジェクトがどのように実施されたのか、実施期間にどのような問題や課題がどのようなステークホルダー間で生じていたのか等、プロセスの把握が困難である。また、それが外部条件や前提条件が変化し

ないことを前提とする単なる仮定にすぎないとして、「変化する現実」に対する脆弱性を指摘する声も聞かれる（参考文献⑤参照）。現地の政治的、経済的、文化的諸事情は、現実的にみて「不変」であるとは考えにくい。フィールドやそれをとりにまく隣接的環境は、常に外部社会との相互関係において社会的変化の過程にあるともいえる。このような開発援助プロジェクトそのものやその評価を実体的視野から捉える見方は、「質」を重視する途上国開発の今日の一般的動向に照らして無視することはできない。

それでは、外部条件に関わる事態の変化や予期せぬ出来事を評価のためのデータとしてすくい上げるためには、どのような方法が考えられるのだろうか。変化する現実が時間的に線的な連続性を持ち、それに関係する様々な人びとや組織が空間的な拡がりをもつとすれば、時間と空間双方の連続性を評価データの獲得に取り込むことは考えられる方法のひとつではある。具体的にはプロジェクトの実施プロセスに注目し、プロジェクト内部および隣接する環境や外部的環境を含む現象全体を把握し、評価することである。それは、ログフレームを用いた評価が「成果」や「結果」といった比較的「点的」な現状把握に主眼をおいているのとは対照的である。

JICA（国際協力機構）のような援助実施機関は、実施プロセスの把握を評価の重要な一部分として位置づけている。JICA

CAによると、「実施プロセスの情報とは、活動の状況やプロジェクトの現場で起きている事柄に関するもので、たとえば、専門家とカウンターパートのコミュニケーション、プロジェクトと受益者との関わり、本部とプロジェクトとの関わりなど、定性的な情報が多い。（中略）実施プロセスの情報は、プロジェクトの阻害・貢献要因を分析するときに活用できる」（参考文献①参照）という。実際にJICAの評価報告書には、必ず「プロジェクトの実施プロセス」という項目がみられる。しかし、実際に評価報告書に述べられるその内容は、一般に要約的であり、「プロセス」という線的な特性を十分に表現しているとは言い難い。実施プロセス（出来事や結果の連鎖）の把握が、プロジェクトの内部環境を中心とする現象全体のダイナミズム（変化する現実）を映し出す行為であるとすれば、プロセス全体の詳細な記述は、調査者のフィールドノートや関係文書にとどめるのではなく、「報告」として、あるいは報告として記述できないナイーブな事象については何らかの「行為」を通じて明示する必要がある。開発プロジェクトの実施プロセス（変化する現実）を詳述する（あるいは追い求める）行為は、従来人類学者が親族や儀礼などを社会における「制度」として分析対象としてきたことと基本的に変わらない。開発援助の実施者や技術専門家、開発コンサルタント会社等とは異なる「人類学的」評

価にアドバンテージがあるとすれば、全体論的視点からプロジェクトそのものやプロジェクトを巡って生起されるステークホルダー間の相互行為に関わる変化のプロセスとそれのもつ意味（意味のコードの枠組み）をさぐることである。そしてさらに、プロジェクトの政策立案や実務に関わる人びとが信じるプロジェクトの意義や有効性、妥当性等や住民参加の姿、彼らを含むステークホルダー間の関係等、プロジェクトに関わる諸活動を相対化する視点である。開発援助関係者は、自らの存在理由に関わる「援助の枠組み」を決してはずさない。それを取り外し可能なものとして柔軟にイメージしうる人類学者との視点の違いは明らかである。変化する現実を現地住民に近くところから線的に把握し、なおかつ援助の枠組みを自明視しない柔軟性は、「人類学的」であることの特徴（強み）である。

開発援助における「人類学的」実践は、地域住民の視点に寄り添い、社会文化的視点からの解釈を交えながら関与することを前提としながらも、そのこと以外に「ツール」があるわけではない。単なる対話や雑談にとどまる場合もあれば、そこから（様々な過程を経ながらも）、具体的な支援活動に発展することもありうる。

●「利用者」主権の原則 ―「人類学的」の制約

しかし、人類学者による開発援助への関



開発援助と人類学

与は、単に人類学者が「人類学的」実践を行なうことを意味するわけではない。開発援助に関わる人類学が「応用科学」である以上、常に「利用者主権の原則」があることを忘れてはならない。ここでいう「利用者」とは、ODA実施機関やNGOなど、支援する側の組織や個人を意味している。「人類学的」である人類学者の知見や行為が開発援助の評価や実施段階のどこかで「利用者」の関心に「貢献する」可能性をもたなければ（使ってもらえるもの）でなければ、意味をなさない。開発の文脈において、対象となる人びとの目線に寄り添う性質をもつフィールドワークとそれに基づく記述（民族誌）や応用的活動を「人類学的」であることの基本的要件として維持しつつも、「利用者」との関係におけるそのような原則を除外することはできない。

そのために、人類学者は、開発援助の業界で「常識化」している事柄にも一定の親和性をもつことが求められる（参考文献④）。例えば、前に述べたように、ログフレームを用いた諸活動に対して、「変化する現実」という観点からその有効性に疑問を抱いたとしても、現実がそれが「利用者」の間で常識化している手法であるならば、ひとまずその「常識」を受け入れ、「利用者」との対話の機会を確保することが必要である。開発援助に介入する人類学は、開発援助の文脈において大きな期待であると同時に、利用者主権の原則による制約を常に受け

続けるものなのである。

●「人類学的」の第一歩

開発援助の文脈において、特定のプロジェクト案件のために見知らぬ国や地域を訪れ、短期間のフィールドワーク（一般に「現地視察」や「調査」の名で呼ばれる）のみで「人類学的」と名のすることはできない。地元の人びととの間で信頼関係を構築する程のフィールド滞在と、現地の社会や文化に関する洞察、そして現地の人びとに近づくところから開発プロジェクトなどの事象を捉える姿勢が求められる。しかし、「現地の人びと」は、内的に分裂や対立、格差やジェラシーなどを通じて、必ずしも統合的状态にあるとは限らない（むしろ、それは稀である）。人類学者が、実際にどのような人びとに目線を近づけるか、その対象となる人びとの概略的な特定は、通常の人類学研究におけるフィールドワークを通じて得られるデータやそれに基づく人類学者自身の解釈によって得られるものである。データ収集や解釈の方法とプロセス、開発援助の枠組みを固定しないことに人類学者の特性があらわれるが、「人類学的」であることの最も基本的な要素である「現地の人びとの目線に近づく」行為や態度自体は、実は人類学者の特権でも人類学者にだけ可能な振る舞いというわけではない。NGOやODAに関わる開発援助実務者や行政官にもありうることである。とりわけ、

NGOの実務者はそのような振る舞いを通じて現地の社会や人びとを理解しようと努める場合が少なくない。

一般に、開発援助の実務に携わる人びとも人類学者も、開発プロジェクトにおいて「人類学的」であることの固有性と優位性を了解していない。そのことが両者の意味のある相互関係の実現を阻む一因にもなっている。「人類学的」であることの要件を無視して「開発援助と人類学」を語ることはできないが、それを満たすことは実はそう難しいことではない。「利用者」という言葉の中心に「現地の人びと」を据えるだけで、まずはその第一歩になるのである。（せきね ひさお／筑波大学大学院人文社会科学部准教授）

《参考文献》

- ① 国際協力機構編『プロジェクト評価の実践的手法—JICA事業評価ガイドライン改訂版』国際協力出版会、二〇〇四年。
- ② 清水展「噴火のこだま」九州大学出版会、二〇〇三年。
- ③ 関根久雄「実践論」綾部恒雄編『文化人類学二〇の理論』弘文堂、二〇〇六年。
- ④ 関根久雄「対話するフィールド、協働するフィールド—開発援助における人類学の『実践』スタイル」『文化人類学』七二巻三号、二〇〇七年。
- ⑤ 野田直人「開発フィールドワーカー」筑地書館、二〇〇〇年。